「逆転の真理」

マルコによる福音書１０章３５－４５節

森島 牧人 牧師

今日の聖書は、過越祭が近づいている中での出来事です。年に一度のこの祭りのため、イスラエルの人々は其々自分たちのラビを先頭に立て、都詣での歌を歌いながらエルサレムに向かっていました。そんな集団の中の一つが主イエスの一行でした。聖書には「一行がエルサレムへ上って行く途中、イエスは先頭に立って進んで行かれた。それを見て、弟子たちは驚き、従う者は恐れた。」（マルコ１０：３２）とあります。信仰の導き手として先頭に立ち、毅然として進んで行かれる主イエスの姿を私たちは見るのですが、それを見て弟子たちや従う者は＜驚き＞・＜恐れた＞とあります。いつもとは異なる主の強い気概に押されて、彼らは驚くと同時に不安に襲われたと思われます。

聖書には、その途上で主が十二弟子を集め、「・・・人の子は祭司長たちや律法学者たちに引き渡される。彼らは死刑を宣告して異邦人に引き渡す。異邦人は人の子を侮辱し、唾をかけ、鞭打ったうえで殺す。そして、人の子は三日の後に復活する。」（同１０：３３－３４）と言われたとあります。親を捨て、故郷を捨て、生業を捨てて主に従って来た弟子たちにとって、主のエルサレムに於ける死の予告は、彼らが動揺するに十分なものでした。その後も変わらずに決然として進み行かれる主と、そんな主に違和感を感じながら離れることも出来ずについて行く弟子たち、両者の間には、大きな距離が生まれていたのでした。その距離が最大のものとなった頂点に主イエの＜十字架＞があり、その十字架の向こう側に＜復活＞があったと言えるでしょう。間もなく主の生涯を通しての願いであり、神の意志である十字架の出来事が、成就されようとしていることを、この時弟子たちは、まだ知らなかったのです。

そのような中で発せられたのが、ヤコブとヨハネによる「栄光をお受けになるとき、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせて下さい。」（同１０：３７）でした。そして、このヤコブとヨハネの懇願に先立つカファルナウムでの「誰が一番偉いか」の言い争い、ペトロの「主に従って来た者としての優先権」の主張など、いずれも＜神の御子による人間の救済が神の意志であり神の愛である＞ことを主が語られた直後に、人間は自分のポジションを漁るという救いがたい罪人としての姿を見せていたのです。

ここで、神の意志である主イエスの願いと、人間の願いとの甚だしい違いをはっきりと見ることが出来ます。また、弟子たちは主の宣教の言葉「神の国は近づいた」（同１：１５）を通して、すでに「神の国」の到来を聞き知っていましたが、その理解は古来のイスラエルの一般の人々と同じく、母国であるイスラエルの回復にあり、主イエスの十字架とは無関係な世界のものだったのです。

聖書には主がそんな一同を呼び寄せ、「異邦人の間では、支配者と見なされている人々が民を支配し、・・・。しかし、あなたがたの間ではそうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は皆に仕える者になり、・・・。」（同１０：４２－４４）と言われたとあります。これは道徳的・倫理的な話ではなく、彼らの神の国に対する認識を確かなものにするためのものでした。そして主は、「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」と言葉を続けられます。これは＜私があなたがたのために死ぬから、あなたがたは生きなさい。そしてその手を少し他者のために使って、生きる者となりなさい。＞との御言葉に外なりません。ここにある、この逆転の折り返し点、これこそが主イエスの＜十字架＞であり、主イエスの＜死＞の意味するところである思われるのです。

（説教要約　羽入田悦子）